

中世源氏物語享受史の一面：『源中最秘抄』を中心に

田坂, 憲二
福岡女子大学助教授

<https://doi.org/10.15017/11958>

出版情報：語文研究. 64, pp.1-16, 1987-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



中世源氏物語享受史の一面

——『原中最秘抄』を中心に——

田 坂 憲 一

一 はじめに

源光行・親行・聖覚（義行）・行阿（知行）と、河内方四代に亘って作成・継承された『原中最秘抄』が、中世における源語享受史を考^{注1}える上で極めて重要な資料であることは、既に考察したことがある。『最秘抄』は様々な資料的価値を有するものの、その最たるものは、他の注釈書には類例のないほど多数の有識者の言を記し留めている点であり、しかもその多くは、同書によって初めて源氏物語との関わりを知ることができる人物なのである。更に、それらの人物は、血縁・姻戚・学統の上で相互に関係を有するものも多く、いくつかのグループに分類することができる。

本稿では、この問題に焦点を絞り、『最秘抄』中に言説の見える人物について考察し、同人及び周辺の人物の源氏物語との関わりを併せみることによって、源氏物語に造詣の深い家系・河内学派の研究人脈について浮き彫りにしたいと思う。

論述に際しては、原則として最初に系譜を示し、然る後に具体的

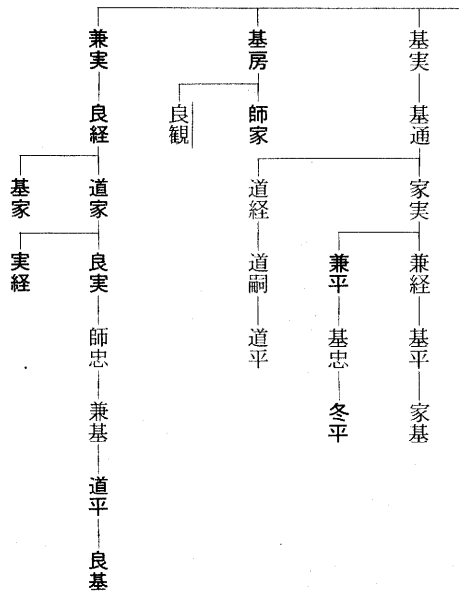
に考察する形式をとる。系譜中、ゴシック体で示したのは『最秘抄』中に登場する人物であり、傍線を付しているのは本稿中で言及する人物である。

二 北家藤原氏撰家相統孫・公季流

平安最末期から室町時代にかけて、撰家相統孫八世代のうちに、十二名もの人物の名を『最秘抄』中に見出すことができる。このうち、基房・師家・兼実・良経・道家・基家・実経・良基・冬平の九名は、揚名介の項に集中しており、これが松殿・九条流に伝えられた撰家の秘説でもあったことがわかる。

松殿基房（1144—1236）師家（1172—1240）父子は、『最秘抄』中には、揚名介の項にのみ引用されるが、基房の方は書陵部蔵『源氏秘義抄』^{注2}附載の仮名陳状（以下『源氏絵陳状』と略称する）によれば、陳状の一方の発言者である小宰相の局は基房の源氏物語談を聞いており、一家言あった人だったらしい。猶、『最秘抄』若紫・聖徳太子の数珠の項に、文永年中にその数珠を実見した人物として、良観上人

道長——(四代略)——忠通



の名が出てくる。師家弟に良観僧正がいるが、年齢的に少し無理があるろう。

九条流は、松殿・近衛流に比し、源氏物語・河内方との関係は、最も密接なものがある。後京極良経(1169—1206)の「紫式部が源氏(中略)身に添へぬことはなし」という発言は有名であるが、『最秘抄』完本奥書によれば、光行が『水原抄』を作成する際に、「悉被合力談申」したと記された四人の人物「良経・通光・実定・俊成」の一人でもある。須磨・屏風のおもての項にも、その説が引用されている。良経男、道家(1193—1252)基家(1203—1280)の兄弟は、天福元年

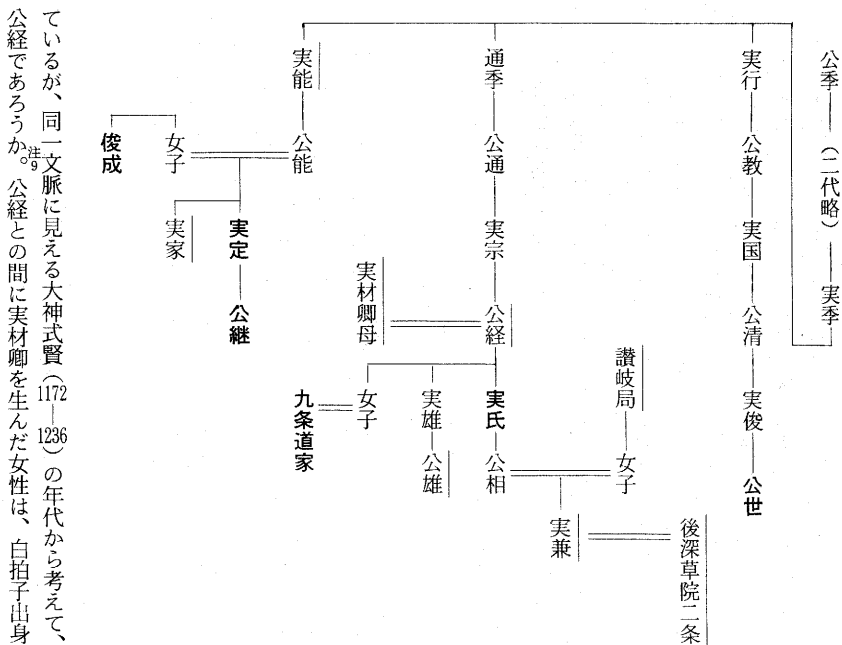
に作製された源氏物語を中心とする物語絵の、有力な後援者であったことが報告されている。道家男、二条良実(1216—1270)の説は若菜上・しほれたる枝の項に、良実曾孫道平(1287—1335)の説は賢木・宿直物の袋の項に見られる。二条良基(1320—1383)は『最秘抄』本文中に二箇所その名が見えるが、行阿が『最秘抄』を伝授した相手でもある。円明寺殿一条実経(1233—1284)は、『最秘抄』中に五箇所に亘ってその言が記され、俊成・定家・為家などと肩を並べるほどである。源語享受史の上ではそれほど注目されてきた人物ではないが、源氏物語に関して深い学識を有し、河内方とも緊密な関係を持っていたと思われる。

近衛流では、鷹司兼平(1227—1294)兼平孫冬平(1275—1327)の説が、それぞれ一箇所ずつ引用されるだけであるが、『光源氏物語本事』にその名前の見える「春日局近衛」も、近衛家周辺の人物であろうと推測されている。

閑院公季流の人々も、源氏物語との関係が深い。

三条実行の六代の後胤、從二位侍從公世(？—1301)の説は、梅枝・孫王の御いましめ、若菜下・こかのしらべの項に見ることができ、香道・音楽に堪能であったことがわかる。公世の説は、『長冊聞書』所引「雪月抄」逸文中などにもみえる。

通季の曾孫、西園寺公経(1171—1244)は、西園寺家中興の人物であるが、その詠歌には源氏物語を本歌取りしたものがある。一条能保女を妻とし、以降代々鎌倉との関係は極めて深く、河内守源光行一統との関係も自ら生じたであろう。猶、『最秘抄』紅梅・皮笛の項に見える「故今出河入道大臣家」については、未だ人物を特定し兼ね



ているが、同一文脈に見える大神式賢(1172—1236)の年代から考えて、公経であろうか。公経との間に実材卿を生んだ女性^{注9}は、白拍子出身

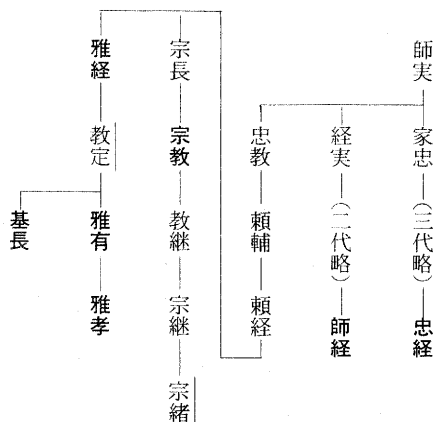
ながら、その家集『実材卿母集』からは、源氏物語を深く愛好していたことが伺われる。^{注10}西園寺実氏(1194—1269)は、後鳥羽・後嵯峨院歌壇の実力者であるが、こかのしらべの項にその説が見える。実氏男公相は、讃岐局(第八節参照)の女との間に実兼を儲けている。公経孫、正二位権中納言小倉公雄は、源氏物語の巻名を詠み込んだ和歌を作っており、曾沢太吉氏によれば、^{注12}聖覚によって勸進された親行遠忌の際の歌会で詠まれたものであり、河内方とも近い人物であったことになる。

徳大寺実能周辺の人々も、源氏物語や河内方とは深い関係がある。『実能公記』が『最秘抄』三日夜の餅の項に引用され、実能孫実家は、源氏物語の巻名に寄せる歌を詠んでいる。^{注14}後徳大寺実定(1139—1191)は、良経らと共に『水原抄』に協力したとされる人物の一人であり、その男左大臣公継(1175—1227)は、少女・御としみの項に自説を述べ、又、彼の所持本は、野宮左大臣本として知られていたようである。^{注15}

三 北家藤原氏師実流

師実流としては、花山院入道右大臣(忠経)と、前右府師経公(大炊御門)、二人の説が、それぞれ一項目ずつ『最秘抄』に見出せるが、特に河内方に近い家系というわけではない。忠経(1173—1229)は清盛女を母とし、「建礼門院周辺における源氏物語関係者の一人」ということになり、師経(1186—1259)には、和歌・文学の世界で目立った業績はない。

師実流で河内方と深いつながりを持つのは、飛鳥井・難波の両家



である。

從三位參議藤原雅經（1170—1221）は、飛鳥井家の鼻祖、新古今撰者の一人、勅撰集入集一三四首、『革新別記』他の著述があり、和歌・蹴鞠の飛鳥井氏の家学の基礎を固めた。頼朝の知遇を受け、大江広元女を妻とし、京・鎌倉の文化交流の橋渡しの役割をつとめ、その意味でも、その後の飛鳥井家の方向を定めた。若菜上・しほれたる枝の項で、蹴鞠について自説を述べている。雅經二男、正三位左兵衛督教定の説は『最秘抄』には見えないが、宗尊親王に親近し、『源氏絵陳状』によれば、親王が色紙形の源氏絵を調進させた折の、絵の奉行人であった。教定の妻（雅有母）は、北条実時女であり、鎌倉・河内方との関係は一層緊密なものとなった。^{注17}

教定男、從二位參議雅有（1241—1301）が、京・鎌倉を往復した足跡は、『都の別れ』『春の深山路』等の仮名日記によって、明確に知ることができ^{注18}。母の出自などもあって河内方に親しく、『為家書札』によれば、弘長三年（二十三歳）以前に、河内方の源氏学へ接近している。家集『隣女和歌集』には、親行へ揚名介について問ひ合せた時の和歌が残されている。^{注19}『嵯峨の通ひ』によれば、為家・阿仏尼から源氏物語の講義を受けており、河内方・御子左家の両系統の源氏学を吸収している。『弘安源氏論義』では、左方の筆頭をつとめ、『源氏物語のひじり』と呼ばれ、当時の第一人者であった。『最秘抄』桐壺・大蔵卿藏人の項に見える雅有説は、『弘安源氏論義』からの引用である。

『原中最秘抄』には、明石・少女・夢浮橋の三箇所に亘って、基長卿、基長三品、の名が見える。雅有弟基長は、『尊卑分脈』に「侍従」と記されるのみで、『公卿補任』にもその名は見えないが、上記、飛鳥井家と河内方・源氏物語との関係から推して、同一人物とみてよいのではないか。基長自身、鎌倉にしばしば赴いていることも、兄と共に為家の嵯峨山荘を訪れていることも、諸種の雅有日記によつて知られる。『最秘抄』しほれたる枝の項に、雅經と共にその名が見える雅孝（1281—1353）は、この基長の実子であるが、男雅頭に先立たれた雅有の猶子となっている。

難波氏は、雅經の兄宗長を祖とし、飛鳥井家同様、代々蹴鞠の法を伝える。前述、しほれたる枝の項に、難波宗教・宗雄卿の名が見え、蹴鞠の折の飲食の内容、懸木を植える方角、鞠を花にあてて散らすか否かなどについて、飛鳥井流とは対立した見解を取っている。

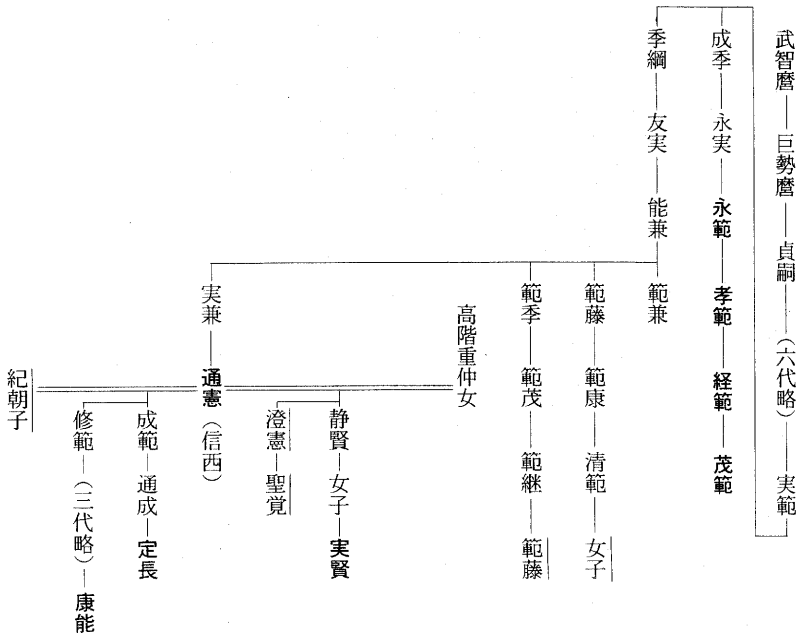
以降）は、北家末茂流。義兄弟の西園寺実氏・二条良実の説も『最秘抄』に引用されており、河内方とは因縁浅からざる人物である。

隆親の祖父隆房は『平家公達草子』の作者に擬せられているが、建礼門院所蔵の二十卷本源氏絵が、鎌倉將軍家へ移る際の仲介をした可能性のある人物の一人である。^{注24}隆親八代の後胤、四条隆量は、松永本『花鳥余情』の書写者として著名であり、桃園文庫旧蔵『源氏物語人々居所』には、「放出」に関する隆量の説が引用されている。^{注25}^{注26}源語享受史上、看過できぬ一族である。

六条藤家と源氏物語との関わりについては、既に寺本直彦氏の体系的な考察があり、それに付け加えるものは始どない。『最秘抄』には、清輔や顕昭の名前も見えるが、何れも『奥儀抄』や『袖中抄』からの引用である。ただ、葵・法界三昧普賢大士の項に見える実賢僧正（1176—1249）が、六条藤家の流れを汲む人物であることを指摘しておきたい。河内方の学問は、実証主義、用例主義という点で六条藤家の学問と相通ずるものがあり、何らかの影響を受けていよう。

『最秘抄』若菜下・椿餅の項には、「行阿むかし紙屋河三品顕季卿に尋申侍しかば、椿餅合葉の次第被伝受畢、其説に云」として、顕季卿の説が引用されている。六条藤家の祖顕季では、時代的に全く合致しない。行阿の時代で、三位に上った紙屋河家の人物としては、顕教・顕名・顕香があり、彼らの何れかの名前が、顕季と誤写されたのではあるまいか。^{注28}

五 南家藤原氏貞嗣流



藤原永範以下、直系四代の説が、何れも『原中最秘抄』に見え、河内方とは深いつながりを持っている。

永範(1102—1180)は、文章博士・式部大輔・東宮学士を経て、正三位宮内卿に至った。名儒の誉れ高く、一方では、勅撰集に九首入集し、清輔の主催した和歌の尚齒会の七叟の一人であるなど、和漢兼才の人であった。永範の説は、橋姫・扇にて月を招く事の項に見える。『河海抄』では、この部分其長説となっているが、既に論じたように、永範説と見るのが妥当である。

藤原孝範(1158—1233)は、永範の猶子、四代の中では彼一人三位に列せられず、官位の上では不遇であったが、学問的には養父永範を越え、『柱史抄』『明文抄』『秀句抄』等多数の著述がある。周知の如く、源光行の漢学の師であり『蒙求和歌』『百詠和歌』には、跋文を寄せている。永範以下四代の説が『最秘抄』に集中してみられるのは、孝範と光行との師弟関係に起因するものである。又、池田亀鑑氏の指摘されるように、孝範は定家とも顕昭とも交渉があり、河内学派の学問形成に有形無形の影響を与えている。孝範の説は、紅葉賀・御后言葉の項に見え、他に『河海抄』賢木・韻塞の注に『孝範朝臣記』が引用されている。

孝範は北家の出で、請われて永範の猶子となり南家の学を継いだ。その出自については、『尊卑分脈』に次の一説がある。

(A)冬嗣—良仁—(四代略)—忠頼—盛仲—利永—孝範
(B)真夏—(三代略)—篤茂—(三代略)—光憲—盛仲—俊長—孝範

利永と俊長は、恐らく同一人物の異伝と思われるから、系図の混乱

は、盛仲辺りに遡ると思われる。今日でも、(A)説(『源氏物語大成』岩波『古典文学大辞典』)、(B)説(『河内家源氏物語問題』)と、両説が存し、結論を見ていない。あえて推測すれば、真夏流では、篤茂を中心に光憲まで、七代で六人の文章博士を輩出しているのに対し、良仁流にはそのような人物は見出せず、(B)説の可能性が強いのではないかと思われる。

経範(1189—1257)茂範(1236—1294)も、共に永範・孝範に匹敵する名儒であるが、それぞれ『最秘抄』に一目目すその説が見えるのみで、他に源氏物語との関わりは拾いえない。

一代の碩学・蔵書家で、保元・平治の乱を惹起した、藤原通憲(信西入道)の周辺にも、源氏物語と関わりの深い人物が輩出している。

通憲自身としては、揚名介の問題について一家言持っていたことが、略本系『最秘抄』から知られる。高階重仲女腹の男澄憲は『源氏一品経表白』の、澄憲男聖覚は仮名文『源氏表白』の、それぞれ作者ではないかと推測されている。既述の実賢僧正は、重仲女腹男静賢の孫でもある。通憲のもう一人の妻は、後白河院乳母の紀二位朝子であるが、朝子は又、二十卷本源氏絵の作者の一人である可能性が強い。朝子所生の修範から五代目に当る康能(？—1295)は、『弘安源氏論義』では右方々人筆頭として、勝二・持二の成績を修めており、同書の中で「あやしく源氏にたへなりけり」と記されている。大藏卿の蔵人についての雅有とのやりとりは『最秘抄』に再録されている。

さて『最秘抄』紅梅・皮笛の項に「年少人所吹之笛^{定長朝臣説}」と記される、定長朝臣なる人物について一考しておきたい。『尊卑分脈』

等で検索しうる定長なる人物は十数名に上るが、そのうち、時代的にも著しく不相応でなく、何らかの文学的事蹟が知られるのは、次の二名である。

○藤原定長(1149—1195) 右中弁光房男、吉田経房弟、藤原宣孝七代の後胤。参議、正三位。『千載集』に一首入集。

○藤原定長(？—?) 侍従通成男、権中納言成範孫、信西の曾孫。刑部権少輔。『風雅集』に一首入集。

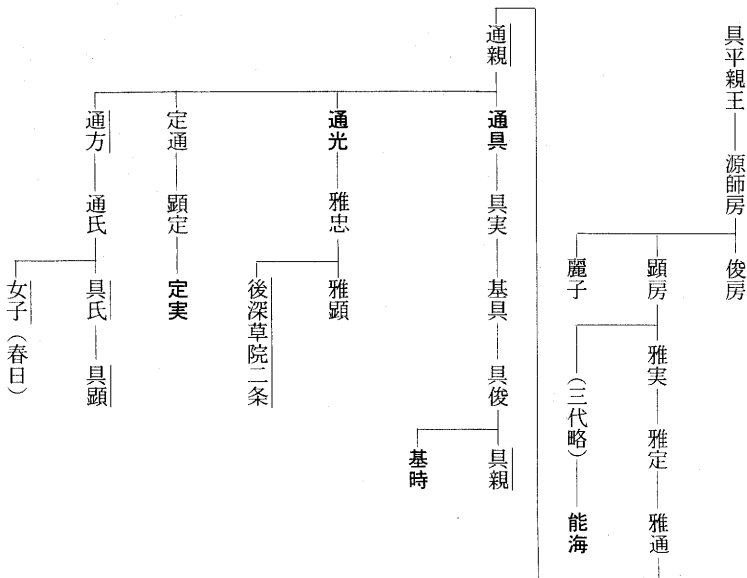
他に、寂蓮の俗名も藤原定長であるが、これは除外してよからう。前者の光房男の定長であるが、弟の藤原光長は、『桐壺墨抄』^{注34}執柄本奥書によれば、源氏物語に関する著述に関わっていたよう、源語との関わりも浅からぬものがある。但し、世代的には河内方の始祖光行よりも一世代前の人物であり、『最秘抄』にその説が取られることは不可能ではないが、蓋然性は少ない。『最秘抄』が『定長朝臣』と記していることも、参議正三位の定長とは矛盾する。^{注35}そこで、消去法で、後者、通成男定長が浮上してくる。通憲周辺と源氏物語との関わりの深さから、今はこの人物と仮定しておきたい。

猶、通憲の従兄弟範茂の孫に高倉範藤があり、『弘安源氏論義』^{注36}右の方の人として楊梅兼行と番わされている。範藤と同世代の清範女は、親行から河内本証本の夢浮橋の書写を依頼された人物である。

六 村上源氏

村上源氏と源氏物語との関わりは、源俊房や従一位麗子の所持本は平安時代の代表的善本であり、河内本を整理する際の基本資料となったこと、^{注37}顕房五代の後胤能海法師(菅原氏の項参照)は、『最秘

抄』にその名が見えるなど、極めて緊密なものがある。ここでは、通親流の人々に絞って考えてみたい。



土御門内大臣通親は、その政治家としての行動、歌人・文人としての側面、共に極めて魅力的なものがあ、早くより論じられることも多かった。その著『高倉院殿島御幸記』『高倉院升遷記』には、源氏物語の影響がみられ、『新古今』所収歌や『千五百番歌合』所収歌には、源氏物語歌の本歌取りがあることが知られている。

通親次男、堀河大納言通具（1171—1227）は、新古今撰者、俊成卿女の夫として知られるが、歌人としての評価は、それほど高くない。俊成卿女同様、源氏物語に依拠した和歌を詠んでいることは既に報告があり、『最秘抄』には、揚名介・皮笛の二項に自説が見られる。

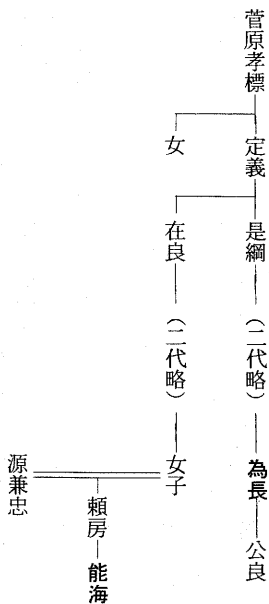
通具から数えて五代目に当る具親・基時の兄弟も源語享受史の上では逸することのできない人物である。まず、從一位内大臣具親であるが、今川了俊の『源氏六帖抄』によれば、延元・康永年間に、自己の所持本と青表紙原本を対校させている。完本に近い青表紙原本の最後の目撃者ともいえるようか。弟の正四位下右中将基時は、『新後拾遺集』に二首採られた勅撰歌人であり、『最秘抄』宿直物の袋の項には、貞治二年五月二日の日付を伴って、彼の説がかなり具体的に記されている。『原中最秘抄』の増補作業の最終段階に属するものとして注目される。

通親三男、後久我太政大臣通光（1187—1248）は、通親流の人物の中でも、特に河内方との関係が深い。良経・実定・俊成と共に『水原抄』に「合力」した人物であるが、四人の中では最も若く、光行・親行が『水原抄』の作業に従事した時期と、彼の生涯は完全に重なり、唯一の実質的な協力者であった可能性がある。天福元年の物語絵作製の後援者の一人であり、物語月並絵詞の書写も担当している。通光の孫女、後深草院二条の手になる『とはずがたり』の随所

に源氏物語の影響のあることは、今更言を俟たない。通親四男定通の孫、堀河相国定実（1241—1306）は、『最秘抄』絵合・御ぐしの宮の項に、その説が見える。

通親五男、土御門大納言通方は、前記天福元年の物語絵では、更級日記の抜書を担当している。通方の孫、從二位参議具氏は、『光源氏物語本事』によれば、源氏物語の「譜」について、家良・知家・光俊らと並んで意見を求められ、目録説を述べており、斯道の権威と目されていたらしい。猶、『光源氏物語本事』にその名の見える春日局^{北條}について、諸説あるものの未だ確定を見ていない。具氏の姉妹に、後嵯峨院に仕えた春日なる女性がおり、近衛との関連は不明であるものの、これも候補者として加えておくべきであろう。具氏男、左中将具頼は、二十代で早逝したが、『弘安源氏論義』左方々人として、藤原為方と番えられている。『論義』の筆録者でもある。

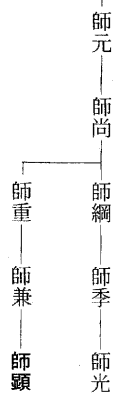
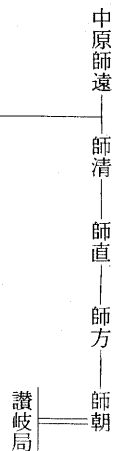
七 菅原氏・中原氏・清原氏・賀茂氏



正三位参議菅原為長(1138—1246)は、菅家歴代の中でも特に鴻儒の誉れが高く、有職・和歌・書にも長じていた。その多方面に亘る活躍は、既に先学の縷述するところである。^{注44}『原中最秘抄』では四箇所に亘って彼の説を引いているが、これは、俊成・定家・一条実経らと肩を並べる数である。為長の説がこのように多く引用されているのは、藤原孝範、藤原定家を媒介として考えるとわかりやすい。即ち、為長は孝範の父永範の弟子であり、孝範とは同年、又、定家とも親交があった。為長の勅撰集人集歌の大部分が大嘗会の際に詠進したものであることは、永範と全く同じであり、孝範が順徳院のため『明文抄』を編纂すれば、為長は九条良輔のため、同じく金言佳句集である『管蠡抄』を撰述しているなど、様々な点で共通項が存する。永範・孝範、光行・親行、為長、定家は、相互に影響を与えていたであろう。

為長男公良の説は、『紫明抄』夕顔・きりかけだつもの項にみられる。そこでは、「萱三品云、公良がほかはきりかけたつ物といふ事しれる人なし、となん申されけるとぞ」と記されているが、『仙源抄』では、この部分を略述した後、「水原云、あながち秘事にあらず、しとみといふ物也」と述べている。公良は河内方の中でも素寂に近く、『水原抄』(この部分は親行の手になるか)は、それに反撥しているのであろうか。

『最秘抄』若菜・金剛子の数珠の項に見える能海法印は、『新後撰集』『玉篋集』に一首ずつ採られた勅撰歌人であり、父方の祖母が菅原氏の人である。



『原中最秘抄』落標・童隨身の項には『師光朝臣記』が引用されているが、これは『長寛勘文』を勘申した正四位下大外記中原師光(1204—1265)の日記である。師光甥の師顯(師光は師重の妻子であり師季の猶子となつた)の説も、宿木・浅香のをしきの項に見られる。猶、次節で述べる讃岐局は、同族の中原師朝の妻となっている。

清原頼業—仲隆—教隆

絵合・薰衣香、少女・をしかいもののあるじの項に見える教隆卿は、清原頼業の孫。教隆(1199—1265)については、山岸徳平氏の詳しい考察がある。^{注45}宗尊親王に従つて鎌倉に下り、北条実時の蒐書にも協力した。源親行と極めて近い人物である。源氏物語に関する教隆の説は、『最秘抄』以外に、『異本紫明抄』『仙源抄』に見られる。教隆に関連して、『最秘抄』に見える幕府周辺の人物をあけておくと、後藤基政、加賀大僧正定清がある。

藤原魚名——(十六代略)——基綱——基政

定清

定清の説は賢木に、基政の説は橋姫に、それぞれ一項ずつ見える。基綱・基政父子は歌人としての活動も多く、源氏物語について一家信持っていたことも想像しうるが、定清の和歌・文学との関わりにについては未詳である。

賀茂保憲——(五代略)——在憲——(九代略)——在基

藤裏葉・四月ついたちの項にその名見える賀茂在憲朝臣は、陰陽頭・内蔵助で、賀茂保憲の六代の後胤である。在憲自身の源氏物語との関係については、他に知る手掛りを見出しえない、但し、直系の十代目に当る賀茂在基は『源氏物語人々居所』の南の寝殿の項に説が見え、『仙源抄』には賀茂氏が「なか神」について長神説を取っていることが記され、必ずしも源氏物語と無縁の一族ではない。猶、在憲は、類従本『諸道勘文』に保延六年の勘申文が残されており、源光行より一世代前の人物である。

八 音楽関係の人物

紅梅・皮笛の項にその名見える大神式賢(1172—1236)は、『龍鳴抄』『龍笛譜』の著者で堀河・鳥羽帝の笛の師であった山井基政の曾

大神晴遠——惟遠

惟季——基政——基賢——宗賢——景賢

女子——式賢

建礼門院右京大夫

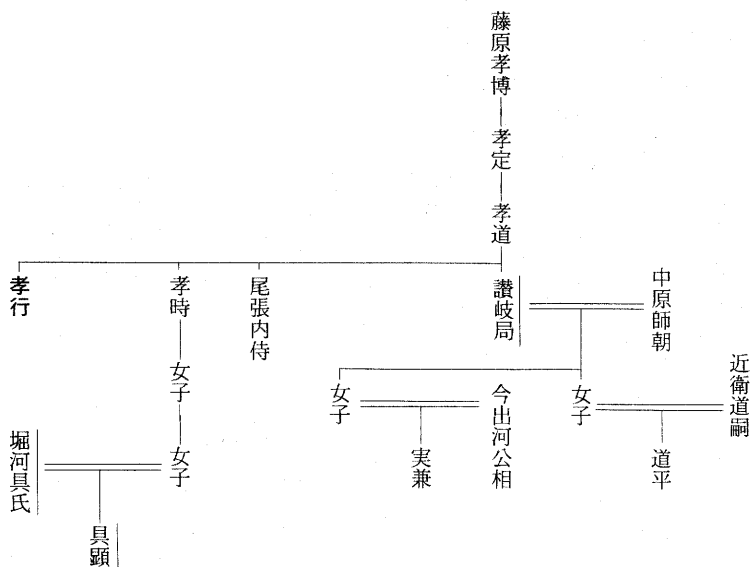
藤原伊行

孫、右近將監宗賢男。大神氏は代々笛を主業とし、式賢も「笛一者」であった。皮笛の考証という点では、最適の人物である。式賢は又、定家・家隆と交友があり、貞応元年七月には石清水八幡宮で歌会を催すなど、和歌とのつながりも深い。

中原頼盛——有安——景安——光氏

藤裏葉・しらつるはみの項で舞の切柴曲の例を引き、若菜下・こかのしらべの項でも自説を述べている伶人光氏は、九条兼美・鴨長明の琵琶の師であった案所預中原有安の孫。父の景安は『案所補任』嘉禄元年の項に「下向関東、為鎌倉一者」と記され、光氏自身も鶴岡八幡宮の弁財天を文永三年に建立しており、鎌倉とは深い関係があった。河内方とのつながりも自ら生じたであろう。続類従本『狛

『氏系図』によれば、天福元年に伯近真の猶子となっている。光氏という名前もそのことと関係があらう。^{注51}



若菜下・こかのしらべの項にその名に見える孝行は、『知国秘抄』『木師抄』の著者の案所預藤原孝道^{注52}の二男。一時、『最秘抄』に見える孝行が、源光行男・親行弟の孝行ではないかと推測され、孝行素寂説も出されるに至ったが、今日では否定されている。藤原孝行（後、孝経と改名）の源氏物語に関する言説は『河海抄』東屋・万秋楽の項にも見える。孝道・孝行父子が鎌倉に下向した時の様子は『文机談』に詳しく、この時、源親行らとも接触があっただろう。さて、この藤原孝行について見のがすことができないのは、その周辺に、源氏物語と関わり深い近衛・西園寺・中原・堀河氏の人物の姿が見え隠れすることである。既に岩佐美代子氏らによって中世の音楽関係資料は和歌研究に援用されているが、源氏物語享受史についても同様のことが可能である。ここでは、讃岐局について少しくみてみたい。

『光源氏物語本事』の末尾近くに、次のような文章がある

関東城介平嶋入道をもちて春日局^{近衛}官女^{讃岐局}のたよりにて被送状之 源氏抄事たび／＼中候になにともうけ給らず心もとなきやうに候（中略）

かすがどの、御つばねへ やすもり（下略）

右の文章は、源氏物語に関する京都と鎌倉の具体的接触を示す、興味深い資料である。安達泰盛が春日局の許へ、その官女の讃岐局の縁故によって、源氏抄を借覧するように頼み入れた依頼状であるが、京都方の人物である春日局・讃岐局については、従来は未詳のまま残されている。同資料の発見者である今井源衛先生は、西園寺実兼女の「讃岐二位殿」をあげつつ猶不明とし、福田秀一氏は、金沢文庫古文書（新輯六一四七〇四）に見える「さぬきのつばね」と

同一人物ではないかとされるが、^{注37} 具体的な出自などは未詳である。

この『光源氏物語本事』に見える「讃岐局」こそ、前掲系図に示した藤原孝道女、孝行姉の讃岐局であろう。その理由の一として、藤原孝道（166頃—1237）の娘ならば、安達泰盛（？—1285）と年代的に合致すること。その二として、周辺に源語享受史に関わる人物が多く、特に異母弟孝行は『原中最秘抄』『河海抄』にその説が引用されていること。その三は——これが最大の理由であるが——藤原孝道は西流琵琶の棟梁であり、讃岐局自身も琵琶・箏の各手として知られ、^{注38}「箏にとりては古今並びなき達者」と記されており、『光源氏物語本事』の「琵琶伶人」との記述と合致することである。孝道女讃岐局の没年ははっきりしないが、長女のみ箏の灌頂を授け、二女・三女は弟孝時に託しているから、比較的早くなくなっただらしい。^{注39}父孝道の没年から、さほど遠くはなからう。とすれば、右の安達泰盛とのやりとりは、十三世紀半ば頃のこととならう。

猶、春日局についても、六節で述べた土御門通氏女のかに、近衛道嗣周辺の人物である可能性も生じよう。

九 おわりに

以上、『原中最秘抄』を手がかりとして、中世（特に鎌倉時代の）源氏物語享受史の一面を通観してみた。『最秘抄』に見えるほぼ全ての人物の出自を洗い出してくる過程で、享受史と深く関わる家系・学統・集団を明らかにすることができたと思う。

最後に『原中最秘抄』に見える諸家の説が、河内方の四代のものであるか、考えてみたい。『最秘抄』の作

成・増補過程については、未だ不透明なまま残されているからである。

源光行（1163—1244）親行（118頃—1277頃）聖覚（1250頃—1314以降）行阿（1290頃—1364以降）の四人の生没年から、仮に次のように区分してみよう。

- (一) 光行以前
- (二) 光行時代 1180 ~ 1215 (35年間)
- (三) 光行・親行時代 1216 ~ 1235 (20年間)
- (四) 親行時代 1236 ~ 1270 (35年間)
- (五) 聖覚時代 1271 ~ 1315 (40年間)
- (六) 行阿時代 1316 ~ 1364 (49年間)

これに、『最秘抄』に言説の見える人物の生没年、主たる活躍時期、『最秘抄』本文の記述等を勘案してみると、次のように分類することができる。

- (一) 永範、在憲
- (二) 為長、雅経、基房、兼美、顕昭、公継、孝範、師経、実定、俊成、忠経、通具、良経
- (三) 為家、経範、公経、師家、師顕、式賢、実賢、俊成卿女、定家、定清、道家、頼隆
- (四) 雅有、基家、基政、基長、教隆、兼平、公世、光氏、孝行、資雅、資季、実経、実氏、宗教、定長、能海、茂範、隆親、良観、良実
- (五) 為世、雅孝、後深草院、康能、宗雄、定実、冬平
- (六) 為藤、基時、顕季、道平、良基

(字音順)

右は、極めて大雑把な分類にすぎない。二つの時期にまたがり、判別に苦しむものも少なくない。又、河内方四代が、これらの人物より直接聞いたのではなく、第三者を介しての場合もあるうから——例えば、藤原永範の説は、男孝範を通じて光行に伝えられたろう——更に多少の誤差は生ずるだろうが、一応の傾向のようなものは看取できよう。

従来、河内方の本文校訂・注釈作業の大半は、親行の代で行われたとされてきたが、右の分類でも、(三)(四)を併せると過半数を越え、『原中最秘抄』の諸家の説の偏在度からも、そのことは裏付けられたことになる。又、一方で、為世・雅孝・為藤・基時らの説は、聖覚・行阿の代で取り入れられたことは明らかであるから、聖覚以降も、父祖二代で培った人脈に頼りつつも、新たな説を吸収していたことが窺える。

猶『原中最秘抄』に名が見えつつも、出自その他未詳とせざるをえない人物には、刑部侍郎資憲朝臣(紅梅)、高野住侶琳舜房真筭(若紫)、是心房(若菜上)の三名があり、今後の課題としたい。

注

- 1 拙稿『原中最秘抄』の基礎的考察(『中古文学』37号、昭61・6)
- 2 寺本直彦氏「源氏絵陳状考(上)(下)」「源氏物語受容史論考」所収、昭45)以下、「源氏絵陳状」についての記事は、同書に負う所が大きい。
- 3 一条兼良「天福の寢覚」
- 4 寺本直彦氏「天福元年後堀河院時の物語絵」(注2書)以下、この物語絵についての記述は、同書に負う所が大きい。
- 5 今井源衛先生「了悟『光源氏物語本事』翻刻と解題」(『源氏物語の研究』昭37、昭56改訂版) 猶、六節。八節参照。

- 6 今西祐一郎氏「公季と公経——関院院政と源氏物語」(『国語国文』昭59・6)は、公季・公経と源氏物語との関わりについて論じている。
- 7 堀部正二氏「鎌倉末期の古註雪月抄逸文について」(『中古日本文学の研究』昭19)

伊井春樹氏「長珊閣書」と御説(『源氏物語注釈史の研究』昭55)

8 寺本直彦氏「新古今時代歌壇と源氏物語」(注2書)

9 『五代帝王物語』では公経を「今出川の入道相国」と呼んでいる。

10 『実材卿母集』については、次の文献に詳しい。

高谷美恵子氏「実材卿母集序説——源氏物語との関係(その一)——」(『広島女子大学文学部紀要』4号、昭44・3)

寺本直彦氏「権中納言実材卿母集——その物語享受をめぐる——」(『源氏物語受容史論考 続篇』所収、昭59)

11 実氏の歌人としての足跡は、千葉寛氏「西園寺実氏年譜」(『立教大学日本文学』36号、昭51・7)に詳しい。

12 『統後拾遺集』巻七、物名、五二四。

13 曾沢氏「原中最秘抄聖覚の奥書について」(『国語と国文学』昭43・4)

14 寺本直彦氏「源氏物語梗概書の展開」(注2書)

15 「光源氏物語本事」

16 寺本直彦氏「書院部蔵『源氏秘義抄付載源氏絵陳状追考』」(注10書)

17 北条実時と源親行との関係については、山岸徳平氏「河内方源氏物語開題」(昭9)に詳しい。

18 雅有日記については、水川喜夫氏「飛鳥井雅有日記全釈」(昭60)を参照した。

19 谷山茂氏「為家書札とその妖艶幽玄体——付、越部禪尼消息等の伝本ならびに紫明抄のことなど——」(『谷山茂著作集第四巻『幽玄』』所収、昭57)

20 これが、親行の生存を示す最後の資料ともされる。

21 伊井春樹氏「源氏物語秘説の発生とその展開」(注7書)

22 『続千載集』巻八、羈旅、八五・八五。

23 『春の深山路』弘長三年二月二十二日、同年九月二十九日。

- 24 伊井春樹氏「院政期源氏学の諸相」(注7書)
- 25 伊井春樹氏「松永本花鳥余情」解説、参照。
- 26 寺本氏注10書に、翻刻と詳細な考察が収められている。
- 27 寺本氏「六条家と源氏物語」(注2書)
- 28 字体の上では、顕香の可能性が最も強かろう。
- 29 『古今著聞集』巻五一一〇三話。
- 30 注1拙稿。
- 31 『源氏物語大成』研究篇、第二部第三章。(昭31)
- 32 拙稿「原中最秘抄」の完本と略本」『文章と思想』51号、昭62・2)
- 33 源氏表白については、後藤丹治氏「源氏表白考」(『中世国文学研究』所収、昭18)に詳しい。
- 34 この文献を、池田亀鑑氏は古系図と、伊井春樹氏は、書陵部蔵『源氏物語注釈』所収古注逸文と関係あり、とされる。(注7書、注31書)
- 35 『春の深山路』に登場する、花山院忠経曾孫従二位参議定長も、同様の理由で不適である。
- 36 東山御文庫本・吉川家本等奥書、参照。
- 37 東山御文庫本・吉川家本等奥書、『河海抄』料簡などに見える。但し、従一位麗子本の方は、河内本奥書には見えない。
- 38 品川和子氏「源通親について」(『学苑』昭47・6)
- 39 桑原博史氏「源通親伝素描」(『群書類集成』中古文文学部)昭47)他。
- 40 久保田淳氏「源通親の文学」(『文学』昭53・2)
- 41 寺本直彦氏「俊成卿女と源氏物語」(注2書)
- 42 森本元子氏「俊成卿女の研究」(昭51)
- 43 注31書に詳しい分析がある。
- 44 『原中最秘抄』は、貞治三年に二条良基に伝授されている。
- 45 注5論文参照。
- 46 山崎誠氏「菅大府卿為長伝小考」(『国語国文』昭54・7)
- 47 注17書。
- 48 中川博夫氏「後藤基綱・基政父子」(『国語研究』48・49)に詳

- しい。
- 47 『案所補注』
- 48 久保田淳氏「藤原家隆集とその研究」(昭43)
- 49 中原有安氏については、築瀬一雄「中原有安覚書」(築瀬一雄著作集二『鴨長明研究』所収、昭55)が至便。
- 50 岩佐美代子氏「翻刻頭注『文机談』二」(『鶴見大学紀要』21号、昭59・2)
- 51 伯氏には、始祖光孝以来、光季・光時・光近等、「光」の字を有する者が多い。
- 52 藤原孝道については、石田百合子氏「藤原孝道略伝」(上智大学『国文学論集』15号、昭57・1)に詳しい。
- 53 山脇毅氏「水原抄紫明抄の撰者」(『源氏物語の文献学的研究』昭19、所収)
- 54 山岸徳平氏「源氏物語研究の初期」(『山岸徳平著作集Ⅲ』『物語随筆文学研究』所収、昭47)
- 55 但し、『最秘抄』『河海抄』の孝行を藤原孝行とした上で、『光源氏物語本事』などの新資料も加味して、源孝行素寂説を取る立場もある。(稲賀敬二氏「源氏物語の研究」成立と伝流」など)
- 56 岩佐氏「音楽史の中の京極派歌人達」『源氏・平伝授書による考察』(『和歌文学研究』37号、昭52・9)など。
- 57 注5論文の解釈による。
- 58 福田氏「中世和歌史の研究」(昭47)一三九頁。
- 59 『文机談』巻三
- 60 注58書、注55論文。
- 61 光行以下の生没年の推定については、池田利夫氏「河内本源氏物語成立年譜考」『源氏一統年譜を中心に』(昭55)に従った。
- 〔付記〕
- 本稿は、昭和六十二年度文部省科学研究費助成金(奨励研究A)による研究成果の一部である。